

第 55 回国際研究集会「戦後日本の傷跡」2022 年 2 月 12 日（土）

新世代パネルⅡ「傷としての身体の変容と表象」

「戦地再訪」作品に見る「傷」—戦地空間と身体への異変

名古屋大学大学院 人文学研究科

博士後期課程 2 年 小島秋良

1. はじめに

1964 年の海外渡航自由化以来、アジア・太平洋地域にある旧戦地への訪問が元兵士や遺族によって活発化する。このような戦地再訪は遺骨収集や慰霊を目的としており、政府事業としても行われるが、戦友会による団体訪問や個人での旅行としても数多く取り組まれてきた。帰国後、戦友会では会の行事報告として戦地再訪の概要や感想などをまとめた文集を作成したり、個人では自費出版として作品にまとめたりしている。

本発表では、このような「戦地再訪」作品を分析対象とし、実際にかつての戦地を訪れることで生じる身体、特に感覚への異変描写に着目する。この異変を日本にいた時には意識することなく過ごしていたものが、かつての戦地という空間で「傷」として再び浮上したものとして捉えたい。さらに、異変を作品に「書き残す」という行為に着目し、再訪者によるこのような「傷」との向き合い方を考察する。

2. 戦地再訪について

元兵士や遺族による戦地再訪は遺骨収集や慰霊を目的として行われた。まずは、政府が事業として取り組んできた遺骨収集、慰霊事業の実態について簡単に説明する。

アジア・太平洋戦争での全戦没者数約 310 万人の内、空襲などによる日本国内の戦災死亡者を除く、海外で命を落とした戦没者は約 240 万人とされる¹。戦争後期、壊滅的な状況を迎え生き残った者も戦友の遺骨を持って復員することは十分になし得なかった。遺骨を持ち帰ることは生き残った者の務めとして、その後も元兵士の心に残り続ける。また遺骨の入っていない「空の遺骨箱」が届けられた戦没者遺族にとっては、遺骨が還ってこない中で親しい人の死を受け入れねばならなかった。元兵士や遺族にとって遺骨収集は強い願いとなっていったのだ。

このような状況を受け日本政府による遺骨収集事業が、1951 年のサンフランシスコ講和後から行われるようになる。第 1 次計画 (1952-57 年)、第 2 次計画 (1967-72 年)、第 3 次計画 (1973-75 年) と事業は断続しながら進められ、処理方針も一貫したものではなかった²。1975 年度をもって「計画的遺骨収集」を打ち切るとの方針を出し、その後は第 3 次計画までに相手国との事情等で収容できなかった地域のうち、収容が可能となった地域で実施している。2006 年から現在までは、民間団体等の協力を得て海外未収容遺骨の情報収集を開始し、それに基づく遺骨収集を行なっている。なお 2020 年度末時点で収容した遺骨は約 128 万柱で、海外戦没者の約半数は未

¹ 吉田裕『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』中央公論新社、2017、pp.23-24

² 浜井和史『戦没者遺骨収集と戦後日本』吉川弘文館、2021、pp.3-6

だ遺骨収集ができていない状況である³。

慰霊事業は、遺骨収集事業の第3次計画終了後の1976年より遺族（配偶者、父母、子、兄弟姉妹）による慰霊巡拝として行なってきた。この時期に関しては、「現地の旅行や戦跡の状況が明らかになったことにもよるが、一方では、厚生省が遺骨収集の「概了」を受け、慰霊事業の軸を遺骨収集から遺族の慰霊巡拝に移したことを示す」⁴と指摘されている。また1970年から2001年までに硫黄島と海外14カ所に戦没者慰霊碑が建立された⁵。

以上は国が事業として行なった遺骨収集と慰霊事業の概略だが、この他に戦友会や個人によるいわゆる「私的」な遺骨収集、慰霊事業も1960年代半ば以降盛んに行われていく。さらにこのような戦地再訪は、帰国後、戦友会の会報や行事報告書、個人による自費出版や私家版のルポルタージュなど「作品」として書き残されていく。こうした作品は、行事内容を報告するという目的の他、今後同じ国や地域を訪れ慰霊を行いたいと考えている人へのガイドブック的役割を意識して書かれたり、感想を参加者たちと共有し、戦地再訪を果たした感動や感謝を再び味わうものとして機能したりした。

本発表では書くことを生業としていたわけではない一般の人々が、戦地再訪後に書いた報告書、手記、ルポルタージュなどの作品（以下、「戦地再訪」作品）を分析対象として取り上げる。

3. 「戦地再訪」作品

「戦地再訪」作品は、戦友会や遺族会など団体の会報のように複数人が執筆、編集に携わっているものと、一人の書き手による自費出版、私家版のものがある。前者の作品構成はおおよそ型が決まっており、戦地再訪のスケジュール（日時、訪問場所、慰霊場所、滞在ホテル、使用交通機関など）、慰霊地で読み上げた追悼の詞・慰霊の辞、参加者による感想文・投稿文、参加者名簿が収録されている。

後者は戦地再訪のみに焦点を当てたものだけでなく、戦時中の自身の経験と合わせて戦後の再訪を書くものや、複数回の再訪を1冊にまとめたものなど様々な形式がある。また書き手は自身の年表をつけるなど、自分の半生を振り返る「自分史」としてまとめる傾向がある。

以上のような「戦地再訪」作品は、文章でまとめられるだけでなく詩や短歌といった表現方法をとるものも多い。本報告ではこのような詩や短歌作品の詳細に触れることはできないが、戦地再訪という非日常経験における心情を言語化する際、表現方法として詩や短歌がとられたことは今後の課題として考察していきたい。

「戦地再訪」作品を含むカテゴリーとして「戦記もの」が挙げられる。「戦記もの」の特徴を年代順に整理した高橋は、「戦記もの」を書き手の戦争体験に基づいて書かれたもので、手記、

³ 厚生労働省社会・援護局「遺骨収集事業の概要」2021.5

⁴ 中山郁「東部ニューギニア地域における遺骨収集と慰霊巡拝の展開」『軍事史学』47(3)、2011.12

⁵ 厚生労働省社会・援護局「戦没者慰霊事業の概要」2021.5

回想録、日記、手紙、エッセイ、研究論文、小説など広く指すものとする⁶。さらに上記で言及した詩や短歌も含めて良いだろう。

高橋によると、昭和 50 年代に入ると「戦記もの」は「死者をも生者をも淡々としかも克明に描くもの」が多くなり、「とにかく書き残さなければという気迫が感じられ」ようになる⁷。このとにかく書き残さなければという気迫は、「戦地再訪」作品にも言えるのではないだろうか。敗戦から数十年以上経た後も未だに還ることのできない遺骨が各地に残され、また山奥や政治的問題で立ち入りが制限されている箇所などでは十分な慰霊が行えないままとなっている。戦後日本社会の中で忘れ去られようとしているこのような存在を「書き残さなければ」と駆り立てられる書き手もいただろう。

また長年の願いであった戦地再訪を果たすことは、訪問者が敗戦後も抱え続けた心の重荷を下ろすことにもなる。海外どころか東京に行くことすら初めてという訪問者もいた中で、戦地再訪は非日常的出来事である。その経験や感情は言葉として書き残しておきたいと思わせるものであったといえる。

「戦地再訪」作品が数多く書かれていった背景には以上のような書き手側の要因もあるが、再び「戦記もの」が増加した背景に立ち返り、「戦地再訪」作品の増加と合わせて考えたい。「戦記もの」は昭和 50 年代後半に増加するが、そこには書き手側と出版事情の変化という大きく 2 つの要因があったとされる。書き手側の要因としては、定年、大病などをきっかけに自分を振り返るようになったこと、また年齢的に体力のタイム・リミットを感じるようになったことがある。

出版事情の変化としては光人社、原書房、芙蓉書房、図書出版社など主要な専門出版社に加え、いくつかの「戦記もの」専門の出版社が無名の人々の記録を新たに出版するようになったこと、自分史ブームや自費出版ブームがおこり「戦記もの」の出版が容易になったことが挙げられる⁸。

以上のような「戦記もの」ブームは、「戦地再訪」作品が多く書かれるようになった背景にも重なる。すなわち、書き手の書き残しておきたいという強い気持ちとそれに応えられる出版状況が整っていったのだ。「戦地再訪」作品の出版総数を把握することはできないが、1960 年代半ば以降、戦地再訪が活発化するとともに作品も多く書き残されていった。本発表では 1970 年代～2000 年代の戦地再訪をもとに書かれた作品を分析する。

具体的な分析に入る前に、このような作品が研究対象としてどのように扱われてきたのかを確認したい。先に結論を言うと、遺骨収集や慰霊事業は歴史学、宗教学、社会学、人類学などで取り上げられてきたが、「戦地再訪」作品が分析対象となることはほとんどない。管見の限り元兵士の再訪記を取り上げるものは、金谷安夫『戦塵の日々ー原爆の基地テニアン島の戦闘と遺骨収集』（金谷安夫、1996）を慰霊や過去の記憶との関わりに着目して論じる研究があるのみとなっている⁹。

⁶ 高橋三郎『「戦記もの」を読むー戦争体験と戦後日本社会』アカデミア出版会、1988、p.1

⁷ 6 に同じ p.98

⁸ 6 に同じ pp.100-103

⁹ 金谷安夫『戦塵の日々ー原爆の基地テニアン島の戦闘と遺骨収集』を取り上げるものとして、

遺骨収集や慰霊事業が元兵士や遺族に与える影響関係を論じたものとして、聞き取りやインタビューに基づき分析したものはあるが¹⁰、再訪者が書いた「作品」は見過ごされてきたと言って良いだろう。その原因の一つに入手のしにくさがある。「戦地再訪」作品は自費出版や私家版として刊行されたものも多く、大々的に出回ったわけではない。本発表では、靖国偕行文庫、しょうけい館、昭和館などに所蔵されているものを利用した。

出版数は多くはないが、「戦地再訪」作品は読み手がいることを意識して書かれたものである。戦友会の会報であれば、戦地訪問団の参加メンバーまたは、事情があり遺骨収集や慰霊事業に参加したくても参加できなかったが同会に所属する戦友や遺族、個人的な作品であれば、今後戦地再訪を実現しようと計画する人などが、読者として想定される。ただし厳密には、戦友会の会報と個人的な作品では後者の方が「会」のように固定化された中で読まれるわけではないため、想定される読者に幅があると言って良いだろう。

いずれにせよ両者とも書き手はある程度読者を意識して書くことになる。そのため書き手の中で戦地再訪経験のうち何をどのように書くか、または書けないかという内容や書き方の取捨選択が行われている。

4. 問題設定

以上を踏まえ、本発表では、戦友による戦地再訪を書いた報告記、手記、ルポルタージュなどを「戦地再訪」作品として扱い、かつての戦地という空間のなかで訪問者の視覚や聴覚など身体感覚に生じた異変に対する記述に着目する。戦後の日本社会では経験することのなかった感覚が再訪した旧戦地で生じることから、こうした現象を敗戦から数十年後も消えたわけではない「傷」が浮上してきたものとして捉えたい。

身体に生じた異変は、再訪に参加していない者や戦争経験のない者には理解し難いものとして映ることもある。しかし、書き手は読まれることを前提としてこのような異変、ある種の不思議な経験を書き残すのだ。本発表では文字化し作品として書き残すという行為に着目し、「傷」の語られ方を考察する。戦友会による会報／個人による作品といった作品の形式の違いも踏まえて、「戦地再訪」作品に書かれた異変（「傷」）が再訪者にとってどのような意味づけを持つものであるのかを明らかにすることを試みる。

なお、本発表で扱う「戦地再訪」作品の書き手は遺族を含まず、元兵士に限定する。これは新田による、生き残った戦友たちによる慰霊は、死者と生者との間の強い連帯感と、生者が死者に

以下の研究がある。西村明「遺骨への想い、戦地への想いー戦死者と生存者たちの戦後」『国立歴史民俗博物館研究報告』147、2008.12、西村明「隔たりへの感受性：遺骨収集・戦地慰霊への宗教学的アプローチ」『文化交流研究』27、2014、西村明「トラウマから架橋へ」（田中雅一、松嶋健編著『トラウマを生きる』京都大学出版会、2018収録）

¹⁰ 西村明「遺骨への想い、戦地への想いー戦死者と生存者たちの戦後」『国立歴史民俗博物館研究報告』147、2008.12、中山郁「東部ニューギニア地域における遺骨収集と慰霊巡拝の展開」『軍事史学』47(3)、2011.12

対して抱く集団としての「負い目」から、遺族や国家による異例とは共通の性格を持ちながらも微妙に異なるという指摘を受けてのものである¹¹。敗戦後に戦時中を振り返れば、常に死の危険に晒されている状況は特殊な経験だったと言えるだろう。その経験の舞台であるかつての戦地空間から書き手は生還することができたからこそ、再びその空間を訪れることが可能になるという点を重視したい。

5. 身体感覚に生じる異変・書かれる異変

まず、視覚への異変として山が近づいてくるという現象とその記述を見ていく。分析する作品は日本印緬戦跡慰霊団編『慟哭・インパール・ビルマ戦跡慰霊の記録』（日本印緬戦跡慰霊団、1972）である。日本印緬戦跡慰霊団は、1972年1月～2月ミャンマー、インド、タイで現地慰霊、上空慰霊を行う。『慟哭・インパール・ビルマ戦跡慰霊の記録』（以下『慟哭』）は、慰霊の記録や慰霊祭で読み上げた追悼の辞の他、参加者からの投稿文で構成されている。

山が近づいてくるという異変についての言及は1972年の再訪よりも前、1970年に行われた慰霊の場面でまず登場する。以下はミャンマー、サガインの丘でインパールに向かって「海行かば」を合唱した時の場面である。なお引用の最初の数字は、便宜上引用者が付けたものである。

①少なくとも距離からすると直線距離一五〇軒以上もある印緬国境の山々が我々の眼前に忽然と現れたのである。私も中村氏も、松原孝善先生もその瞬間には己れ達の目をうたぐったが、然し次の瞬間に誰もが眼前に現れたこの虹のようなインパールの山に対して疑いをもたなかった。松原先生は「毎日泣いてばかりいるので目がきれいに洗浄されているからだろう」と云われて、事実と認識されたのを覚えている。（浅井哲「うらばなし」）

直線距離150キロ以上離れた山々が目の前に現れるという現象に、その場にいる「私」（浅井）だけでなく、他の参加者も「目をうたぐ」るが、すぐにその疑いは消え、この不思議な現象を受け入れる。ここでは一見すると見間違いや錯覚の問題だと一蹴されそうな現象が、他の参加者の発言を書くことで「私」（浅井）だけに見えたのではなく、他の人（松原先生）も「事実と認識」したのだという書き方をする。このような山が近づいてくるという異変は、別の場所でも起こる。

②（ミャンマー、シングーイラワジ河岸で慰霊祭を行った時：引用者注）四軒位北にあるクレ高地、更にそれより四軒以上遠くにある筈の、エシンの丘が我々の前に近づき迫って来るのを見た。戦友がその山や丘から顔を出して我々に呼びかけて来るのを感知したのである。我々は大声で戦友の名を呼び求めた。（浅井哲「うらばなし」）

¹¹ 新田光子「慰霊と戦友会」（高橋三郎『新装版 共同研究・戦友会』インパクト出版会、2005、p.222）

ここでも離れているはずの丘が目の前に「近づき迫って来る」。丘が近付いてくるだけでなく、亡き戦友が「顔を出して我々に呼びかけて来る」というように、聴覚にも異変が生じる。それを受けて、「我々」が大声で戦友の名前を呼ぶ。すなわち亡き戦友の声が聞こえるのは「私」だけでなく、その場にいる「我々」なのだ。不思議な現象は一人のみに起きたことではないという書き方が引用①と同様にされる。

さらにこの2年後の1972年に行われた今回の再訪でも同じような現象が起きる。

③「セングマイ」「四九五〇高地」の山々から亡き戦友が顔を並べて我々に迫ってきた。中山善兵衛君が気違いの様に戦友の名を呼び乍らその顔を求めて駆け出したのである。(浅井哲「うらばなし」)

1972年の再訪でも山から亡き戦友の顔が「我々に迫って」くる。その情景は「私」(浅井)にのみ見えるものではない。「中山善兵衛君」という固有名を出して、彼が「その顔を求めて駆け出した」と、その場にいた他の人とも共有した出来事として書き残すのだ。

山や丘、戦友の顔が迫ってくるという現象は、非現実的なものとして日常の中では片付けられるだろう。しかしこの戦地という空間で、さらに複数回生じることで「私」(浅井)は「今度(1972年：引用者注)の印緬国境やインパールでは更にそれが、厳然たるものとして我々に確信をあたえたのである」¹²と断言する。帰国後に日本で書かれた「戦地再訪」作品の中で、この異変を書くことを選択し、その場にいた他の訪問者と共有した出来事であることがわかるように記述するのだ。『慟哭』は日本印緬戦跡慰霊団が編集、出版しており、他の参加者や、事情があり今回は参加できなかった戦友や遺族にも読まれることが想定される。迫りくる山や戦友の顔は自分だけが感じた曖昧なものではないことを読者が共感してくれると推測できるからこそ書くことができたとも言えるだろう。

さらにこの山が迫ってくるという現象は、他の参加者の投稿文にも見られる。

④(戦時中に過ごした山を見て)あの山だ！！と見た瞬間、涙が溢れ出て止めようもない。折りからの快晴に南の陽を受けて、一本一本の木立まで鮮明に見える。誰かがぼつりと言った。／「山が近づいて来るようだ」と。(高畑長治郎「聖地「インパール」入城」)

書き手の高畑は自分の目に山が近づいて来る様子が映ったと明言はしていないが、「山が近づいて来るようだ」という「誰か」の「ぼつりと言った」言葉を引用する。ここでも不思議な現象は自分だけが体験したものではないということがわかるような書き方がされる。

『慟哭』を一つの作品として見た時、この不思議な現象は複数人によって書かれたことになる。作品内に「書く」ことで共有され、さらに「読まれる」ことでも共有される。かつての戦地で身

¹² 浅井哲「うらばなし」

体感覚に生じた異変は「戦地再訪」作品に書かれることで、日本に戻った後も再訪者同士の間に残り続けるのだ。

では、戦友会の会報よりも読者を想定しにくい作品の場合は、身体に生じる異変をどのように書くのか。雑誌『歴史と旅』は2001年2月から7月に「戦地再訪の旅」という全6回の連載を行う。元兵士である訪問者と訪問先は毎回異なり、読者には戦争を経験していない者もいると想定して書くことになる。その中で語られる不思議な現象として、死臭がするという嗅覚への異変に着目する。

⑤洞窟内にいて突然、私は死臭を感じた。なんで今ごろまで……。戦争中のあのやるせない臭いだ。しかし、周りの人は臭わないという。私だけの「幻の嗅覚」だろうか。(慰霊祭が終わると：引用者注) 昨日の死臭は一切しない。不思議だが、これは本当の話である。(小川孝四郎「戦地再訪の旅」『歴史と旅』28(7)、2001.7)

「私」(小川)は1982年8月に西部ニューギニアのピアク島を訪れる。小川は戦時中東部ニューギニア戦線に赴任しており、引用⑤の洞窟は自身が戦時中にいた正にその場所への再訪ではない。しかし、「戦争中のあのやるせない臭い」を感じる。

再訪の時点ですでに敗戦から37年の年月が経っており、死臭がするという事は理解し難いことであろう。その上今回死臭を感じるのは「私」(小川)だけである。同行している他の訪問者には分からないのだ。「私」(小川)は「幻」として自分の嗅覚に生じた異変を疑うが、翌日慰霊祭が終わると死臭がしなくなったと感じる。死臭がしていたという現象を事実として受け入れたのだ。しかし読者には受け入れてはもらえない出来事だと自覚しているからこそ、「不思議だが、これは本当の話である」と注意書きをせずにはいられない。

同じく読者を戦友会会報と比べると想定しにくい作品の例として、別の作品も確認しておきたい。井上一朗『慰霊の旅路 比島今昔物語』(隼書房、1989)は、著者が1985年7月、1986年11月、1988年3月の3回フィリピンを再訪しており、それぞれの経験をまとめて1冊にした作品である。このうち初めての再訪参加である1985年フィリピンのネグロス島で、小石が泣いているという現象が起こる。

⑥(航空部隊の弓削部隊が長く駐留していた地で小石を拾う。ホテルに戻り：引用者注) 入浴後、私はカバンから小石を取り出し、テレビ台上に乗せた。小石を眺めると、拭ったはずの小石が濡れている。私はハッとしたり。小石が泣いている。私が泣かないから、小石が代わりに泣いているのだ。西川君等の御霊が、この小石に乗り移ったのか。／「小石が泣いている」／思わず、私は口走った。／「は一、何ですか」／五十嵐氏が聞き返した。／私の言った意味が判らなかったのである。無理はない、生死を共にした戦友を失って初めて理解できることかも知れない。宗教をあまり信じない私であるが、御霊がこの小石に乗り移った、と信じたのである。／私は、その石を一個ずつ白紙に包み代え、丁寧にトランクの奥深く仕舞

い込んだ。〔…〕（小石 哭く）なみだ枯れ われ泣かざれば 小石 哭く

亡き戦友の存在を他の物、ここでは小石に託すという異変が起こる。「私」（井上）が「小石が泣いている」と口走った時、「は一、何ですか」と聞き返した「五十嵐氏」は遺族で兄を亡くしている人物である。「小石が泣いている」と感じることができるのは、「生死を共にした戦友を失った自分のみであり、「五十嵐氏」が理解できないでいることも「私」（井上）は受け入れている。かつての戦地で生じる不思議な現象は、必ずしも『慟哭』のように再訪者同士共有し合えるものではないのだ。しかし、引用⑤の小川や引用⑥の井上のように、このような不思議な現象を帰国後、「再訪作品」に書く。この「書く」「書き残す」ことは書き手にとってどのような意味があるのだろうか。

死臭も泣く小石も、それらは亡き戦友の存在を蘇らせるものである。かつてともに過ごした仲間を身近に感じさせてくれるものとして現れる。そのため再訪者はこのような不思議な現象を不気味なものとは思わないのである。今もなおこの場に存在する戦友との再会なのだ。

日本へ帰国すれば、再訪者は自分が生きていくために目の前の生活と向き合わなければならぬ。その間は自分の持つ「傷」が戦後社会の中で一旦隠されているような状態となる。しかし、かつての戦地空間ではこの「傷」が浮上して身体感覚への異変として現れる。特に、生還した元兵士にとって戦友が死に、自分だけが生きて帰ったことに罪悪感を抱く者もいる。彼らは遺骨収集や慰霊事業を通して、心の重荷を減らすことができるのだ。

だからこそ、作品に書くことは再会を果たした戦友の存在を残し続けることになる。多くの人には理解してもらえないであろう現象を書き残すことは、書き手にとって「傷」を癒すことにつながっているのではないだろうか。

一方でかつての戦地で起こる不思議な現象全てが、亡き戦友と再会できたこととして好意的に捉えられるわけではない。再訪者自身が感知した不思議な現象には恐怖や嫌悪感がないが、聞いた話として書かれるものは「怨念」や「不滅の霊魂」としてあってはならないものが存在する否定的な意味を持っている。以下に例を引用する。

⑦太郎山にはいると、今でも日本の兵隊が追ってくるので住民は入らないそうですよ。昼なお暗いジャングルの中で、雨降りの日は幽霊が出るそうです。何人も追いかけられたそうです。（井上一朗『慰霊の旅路 比島今昔物語』隼書房、1989）

⑧戦后、ニューギニアの奥深い山中で、夜中に多数の日本軍兵士の喊声を聞くと言う。日本語の全くわからない、現地人の耳に、『万歳』と聞こえるらしい。何と言う悼ましい事か恐らくは全員餓死した部隊で有ろう。未だに怨念が南冥の空に残ってゐると言う事である。（青木孜「慰霊五〇年」（浦健二郎編、第3回オーストラリア慰霊紀行集・カウラのさくら、独飛70マラン会、1998）

⑨訪島した際に、こんな話を聞いた。／寝静まった真夜中に誰かが宿舎の扉をたたく音がしたという。仲間と確認して誰かいると信じて、二人で扉を開けた。微風もなくまんまるい月が輝いているだけだった。人の気配などまったくない。宿舎の周囲には身を隠すような場所などなかった。／または、夜中だというのに厨房から水が流れている音が聞こえてきた、という話も聞いた。確認に行くと、流し場に水の流れた形跡はなく、水栓は固く締まっていたとのことだった。／私はその話を聞いて、《不滅の靈魂がさまよっているのであろうか》と思った。(秋草鶴次『硫黄島を生き延びて』清流出版、2011)

6. おわりに

本報告では、「戦地再訪」作品に書かれた再訪者の身体感覚に生じた異変の描写に着目した。このような異変すなわち不思議な現象は、再訪参加者以外の読者や戦争経験のない者には理解し難いものとして映るだろう。しかし、再訪者にとっては敗戦後の日本社会の中で見えなくなっていた「傷」が、かつての戦地という空間で再び現れ出たものとして捉えられるのではないだろうか。「傷」すなわち異変は語り方に一定の配慮を働かせながらも書き残すという行為を通じて、自身の「傷」と向き合い癒すことが可能となる。

またこのような不思議な現象は伝聞によって、直接自身が経験していない異変も知り得た。1960年代半ば以降、戦地再訪の活発化に伴い数多くの再訪作品が書かれていく。それらは大々的に市場に出回るものばかりではなかったが、再訪を願い計画する者の間では意識して読まれる。その中で伝え聞く不思議な現象は、より一層訪問者の遺骨収集や慰霊事業を行わねばならないという動機付けになっていったのではないだろうか。